

のに、その全てを容赦なく奪い去った人でもあった。セレナの世界は崩れ去った。体の細胞の一個一個に痛みを感じ、言葉にできなかった。

セレナは手紙をピンクのノートに挟み、急いで学校を出て、狂ったように町の通りを走り抜けた。立ち止まりたくなかったのだ。潮風は海の塩辛い匂いを運び、二人が残した思い出はいたる所に見られた。

水晶のような涙が目から溢れ、頬を滑り、地面に流れ落ちた。次の瞬間、まるで空も悲しみを感じているかのように、雨が降り出した。煙雨だったが、ずぶ濡れになった。切れ

